

ピアノ教育における教師の指導言の研究

教科領域教育学専攻
芸術系（音楽）コース
M09188B
田村 由衣

1. 研究の動機と目的

筆者は今まで20年近くピアノと関わってきた中で数多くの教師と出会ってきた。それぞれの教師により教授方法は様々であるが、大きくわけて身体をつかう、言葉をつかう、の2つの指導方法がある。前者は、生徒がピアノを弾いている横で一緒に弾いたり、また指揮のように手で表現を伝えたり、曲の重要なメロディーを歌って伝えたり、生徒の背中を演奏に合わせて押しながら表情や表現や拍を伝えたりと、言葉以外を使って指導する方法である。一方後者は「手は卵を軽く握ったような形で」、「この部分は子犬が駆け回っているように」、「ここは合唱の響きで、次はオルガンの響きで、最後はオーケストラの響きで」等と指導言を使う方法である。この2種類を組み合わせる教師は指導を行っている。

筆者は、実技試験や発表会の前には二人の先生のレッスンを受けることがあったが、楽曲の同じ部分で異なる比喻表現が使われたことが何度もあった。A先生の言葉ではあまり理解できない部分もB先生の的を射た比喻表現を聞いてA先生の言われた意味も理解でき曲をより解釈できたことを覚えている。

また、レッスン中の教師の指導言によって、レッスン後練習する気分にならず、寄り道をしたり帰宅しても練習しなかったりした。反対に別のレッスン日には練習したい気分になり、帰りの電車

の中でも楽譜を見直した覚えがある。また筆者の今まで教わった教師は、悪い部分ばかりを指摘していた人が多かったように思う。そのため、筆者は自身の演奏の悪い部分は数多く知っているが、良い部分をあまり知らない。悪い部分しか知らないと、これもできないあれもできないと自分自身の演奏に自信が持てなくなってしまう。

このように教師の指導言により生徒の学習意欲が削がれたり、自分自身の演奏に自信を失う一方で、より楽曲を理解しやすくなったり、学習意欲を高めたりすることができるのだ。そこでどのような指導言を使うことが生徒の学習にとって望ましいかを具体的に研究することにした。

特に比喻表現の多様性は生徒に音楽のよさを伝え、音楽に目を開かせるに大変大きな役割をもつと考える。アルフレッド・コルトーはその校訂楽譜の中にインスピレーション豊かな文学的表現をつかい、楽曲の核心に迫っている。また名教師の演奏法に関する文献や映像資料の中にも示唆に富んだ言語表現がある。それらを研究すると同時に実際のレッスンを聴講したり、自分自身で指導案を作成したりすることにより望ましい指導言のあり方について分析、考察を行う。

2. 論文の構成

はじめに

- 第1章 ピアノ指導の在り方
 - 第1節 先生と生徒の人間関係
 - 第2節 教師の指導言について
- 第2章 名教師にみる指導言
 - 第1章 A・コルトーの比喩表現と練習方法
— ショパン即興曲集より —
 - 第2節 D・メルレ、P・ドゥヴァイヨン、
R・ホーワットの比喩表現
- 第3章 ピアノ指導現場の実際
 - 第1節 調査方法
 - 第2節 考察
 - 第3節 指導案

おわりに

3. 論文の概要

第1章ではまず先生と生徒のコミュニケーションの大切さと、レッスンにおける大切なことを8項目にまとめ文献や筆者の考えを織り交ぜて述べた。そして本論文におけるピアノの指導言について①先生と生徒のコミュニケーション、②曲の内容解釈をよりよく理解させるための比喩表現、③練習方法の提示、④学習のモチベーションを高める叱り方、褒め方の4つに分類した。

第2章では楽譜や映像資料を用いアルフレッド・コルトー、ドミニク・メルレ、パスカル・ドゥヴァイヨン、ロイ・ホーワット、以上の4人の演奏解釈における比喩表現と練習方法の指導言を抽出した。

第3章では実際に指導現場に行き4人の先生のレッスンを聴講し、指導言を分類し考察を行った。そして最後に、まとめとして筆者がレッスンのなかで今後取り上げるであろう楽曲の中から、小さい子ども用に『ブルクミュラー 25の練習曲』の中から、「小さな集まり」「バラード」を、そして大きい子ども用にチャイコフスキーの『四

季』から「謝肉祭」「舟歌」を選び指導案を考え楽譜に書き込んだ。

この研究で様々な指導言と出会い、子どもたちがそれによって変化していく様を観察してきた。しかし指導言とは、生徒がいて初めて成り立つものであり、何か結論を出したり分類したりすることが難しいことにも気付かされた。同じ比喩表現でも10人いたら10人とも理解できるとは限らずある1人の生徒にとっては理解できない表現であるかもしれない。その場合、その生徒の日常で起りえそうな想像しやすい例えに考え直したり、年齢や性別にふさわしい言い回しを考えたりし、同じ演奏部分でいくつもの違う比喩表現を使用しなければならないこともあるだろう。また、練習方法の場合でも同じことが言える。生徒の技量によって教師はその子にふさわしいさまざまな方法をその都度編み出していく必要があるだろう。

本研究の今後の発展としては、さらに数多くの指導言の聴取・研究を行いたいと思う。それとともに、実際に実践を行う場合にこちらから与えるだけにとどまらず生徒自身によく理解できたかどうか感想を求めたり、同じ楽曲を何人かの生徒に教え指導言にどのような違いを持たせたらよいかなどを研究してゆきたい。言葉の使い方によってピアノ教育がより建設的で創造性に富んだものになるよう努力を続けたいと考えている。

主任指導教員 木下 千代